

389-78



1200700083469

夢の上沙

著情雨口野

書叢人詩代現

12

行版社潮新



始





夢の上沙

著情雨口野

書叢人詩代現

12



版社潮新



389

78

なつかしいのは、故郷の土である。「沙上の夢」は、土の詩であり、私の故郷の詩である。

この集中に収めた作品の多くは、散逸してたづねようのなかつたのを保存して置いてくれた友人藤田健治氏の好意を、私は感謝にたへない。

大正十二年春

著者



I 種
W



1200700083469

目次

沙上の夢

河原の雨……………三
 梅の實……………五
 春の鳥……………七
 村踊の夜……………九
 スイッチョ……………一一
 鶉……………一三
 永い月日……………一五
 異國船……………一七

上野驛……………一〇
 七つの島……………一二
 憂心……………一四
 狐……………一七
 蘆の芽……………一九
 枯れ田……………二一
 忘れてる……………二三
 風は南風……………二五
 おけらの唄……………二七
 星の數……………二九
 十五の春……………三一
 蘆枯れ唄……………三三
 榎の木……………三五

港の時雨

港の時雨……………三八

仇花……………三〇

後姿……………三二

西瓜畑……………三四

五月雨……………三六

夕の月……………三八

葛飾の夏……………四〇

戀のかけ橋……………四二

葱……………四四

唄……………四六

矢車草……………四八

岡の上……………六八

川しぶき……………七〇

有明お月さん……………七二

うづまき……………七四

熱い涙……………七六

兩國のあたり……………七八

角豆畑……………八〇

櫛……………八二

砂の上……………八四

そのころ……………八六

十七花……………八九

見はてぬ夢……………九一

煙草の花……………九三

月影	110
更けゆく夜	111
昔の月	112
馬鈴薯	113
霜夜	114
新開田	115
梭の音	116
裏戸の音	117
甚吾さん	118
夢	119
胸の糸	120
沙の敷	121
夜さり唄	122

傘の下	95
鳴	97
たそがれ	100
鏝	
鏝	104
歸らぬ人	106
片戀	108
蚯蚓の唄	110
畑の上	111
晝顔	114
指輪	116
憎い女	118

沙上の夢

君が名	一四六
菖蒲の花	一四九
可愛い君さま	一五一
垣根の外	一五二
旅で暮らせば	一五五
博多人形	一五六
阿蘇	一五七

河原の雨

河原の石に

降る雨は

戀しい人の

涙かよ

河原の岸の

笹の葉に

さびしう さびしう

雨が降る

「河原の

雨は

降る

雨は」

かなしい唄も

うたはずに

わかれた人の

涙かよ

梅の實

梅の實の落ちしを見ても

かなしくて

心の底に渦がまく

すぎし月日は

歸らずも

歸つて下さらもう一度

忘れよう忘れようとはするけれど
梅の實の
落ちしを見ても思ひ出す

春の鳥

やさしい鳥よ
春の歌
春待つ鳥の
かはい聲
やさしい歌よ
春の鳥

春來る鳥の
かはい歌

村踊の夜

村のお若い衆よ

サツコラサとをどれ

をどれよ!

お月さまから

鬼が見てる

鬼よ!

若い娘の

顔ばかり見てる

顔をよ!

夜は更けたし

サツコラサとをどれ

サツコラサとよ!

スイッチョ

スイッチョ スイッチョと

大阪の

街のはづれで鳴くスイッチョ

姉は 筑紫の

長崎へ

妹も 筑紫の

長崎へ

スイッチヨ スイッチヨと

蔦の葉の

上にとまつて鳴くスイッチヨ

鶉

今日も鶉つぐなが

丘に來て啼いた

おれも泣きたい 鶉の鳥よ

空は乳色に

また日が暮れる

死んで別れた

人ではないし
忘れようとて 忘らりよか

永い月日

永い月日だ
雛芥子の花
枝垂れ柳に
雨さへ降るし
すさみはてたよ
ゆるしておくれ

いつそ田舎に
ゐりやよかつた

異國船

南の風が今日も吹く

筑紫の海へ

阿蘭陀の

船が来るぞへ

惣八さん

この世は夢だと思やんせ

浪華の夢は

一夜草

みちかい みちかい

一夜草

南の風が今日も吹く

沖に見ゆるは

阿蘭陀の

三角白帆の

異國船

この世は夢だと思やんせ

上野驛

女姿で暮らす

新潟の

港へ歸る旅役者

カラシ コロンと

冬の夜の

新潟行の汽車が出る

白粉やけのした顔で

新潟の

港へ歸る旅役者

カラシ コロン

カラシ コロンと

新潟行の汽車が出る

七つの嶋

佐渡は 離れ島

隠岐も

離れ島

伊豆の 八丈も

皆離れ島

伊豆に

七つの

父島 子島

七つ子島も

皆離れ島

離れ島ゆゑ

戀しうて

これさ

伊豆の子島の

七つの島はよ

24

憂
心

戀は さめたし

この世は

夢か

戀も 捨てたし

この身も

夢か

25

なぜに かなしい
この世の
夢よ

狐

霜の降る夜に
狐が
啼いた
尻尾重たかる
足が
冷たかる

田浦そこらこころ

ひとしづか
一晩中

啼いた

蘆の芽

東京の硝子の窓に

雨が降る

しどろもどろに

春の夜の

雨は硝子の

窓に降る

ふるさとの

蘆の芽にさへ

春の夜の

雨はしどろに

降りしきる

歸りませうかふるさとへ

別れませうかこの君と

しどろもどろに

春の夜の

雨は硝子の

窓に降る

枯れ田

稲は刈られた

鳴が来て啼いた

ちよこら ちよこらと

歩き 歩き

啼いた

あまり細い聲だ

可哀想に

思ふた

うすら寒い風が

田の中に吹いてる

忘れてる

おでこ 娘は

十六むさし

ちさいとき泣いた顔

忘れてる

京都智恩院ちおんいんの 廂の上に

大工さんも

傘かさ

忘れてる

おでこ 娘は

十六むさし

泣いたことないよな

顔してる。

風は南風

鶺鴒うぐいすも 青島あおしまも

南の風よ

思ひ出すぞへ

片割月が

誰に焦れてか

晝から出てる

誰に焦れたか

わしや知らないが

風は南風

青島沖の

離れ磯にでも

焦れただろか

おけらの唄

おけらの唄の

さびしさに

窓にもたれて

すすり泣く

まぼろし草も

コスモスも

花は昔の

ままで咲く

おけらの唄の

さびしさに

畳の上に

伏して泣く

星の數

星の數ほどたたなけりや

可愛人には逢はれない

わたしはかなしくなつて來て

泣かずに泣かずにゐられない

星の數ほどたつたなら

わたしを忘れてしまふだろ

十五の春

十五の春は

昨日の夢

もう十六の

春が来た

十六の 春も

昨日の夢とすぎ

また十七の
春が来る

蘆枯れ唄

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

前の河原は

石まで枯れるし

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

裏の畑は
土まで枯れるし

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

蘆の枯れ葉の

蔭で逢ひませう

榧の木

赤い花を今日も一人で見てゐると

ふるさとの

若い女がたづねてでも来さうな気がする

ふるさとの

若い戀しい女達よ

五年六年逢はないが

河原の岸の枯れ蘆は芽もふかず花も咲かずにしまつたか

おみや娘も十七か八九位になつたらう

おれが家の裏の畑の

榧かやの木に

今も鶉つぐみが来て啼くか

鶉つぐみの啼くを聞くたびに

ふるさとの

畑の中の榧の木が

思ひ出されて限りなく

涙が出るぞ

港
の
時
雨

女
達

港の時雨

蛇の目傘に

時雨が降るに

月日かぞへて

涙を見てる

待つはつらかる

待たるる身より

伏木港の

船頭さん達よ

仇
花

月に一度も

逢はずにゐても

かはい サロンの

あの仇花よ

はなればなれに

暮してゐても

戀は濃くなる

浮名は流る

後 姿

うしろ姿のさびしいは
心で泣いてゐるからさ

田舎娘でゐた頃は

可愛姿でゐたんだよ

末^が枯れてかなし牛込の

今はカフエーの若杜

戀の懸橋この上は

渡しておくれよたのむぞへ

西瓜畑

西瓜畑さ

お月さま出てる

そろり／＼と

お月さま出てる

土をたたいたら

どしんこと響いた

姉も 妹も

おさらば さらば

五月雨

五月雨の降る夜に君は

川下の

浅瀬を越えて逢ひに来ぬ

夜の明け頃に歸りゆく

君を幾夜も

川下の

浅瀬の中に見送りし

五月雨の降る夜となれば

なつかしく

その頃の君の姿がしのばれて来る

夕の月

お仲姉さま

畑の中で

しやなりくと

麥踏みしてゐる

雁は歸るし

夕の月は

櫟林の

上から出てゐる

つまらないよと

涙で言うた

お仲姉さま

丸顔だつて

葛飾の夏

卯の花が散る

時鳥が啼く

沼の中に

菖蒲あやぶの花も咲いてゐる

沼の中の

菖蒲の花よ

葛飾かっしやに

今二月ふたつきもゐたかつた

家も屋敷もない おれは

去年の夏は東京に

今年の今は葛飾に

わかれねばならぬ時が来た

この住み馴れた

葛飾の

菖蒲の花よ

又逢はう

戀のかけ橋

戀のかけ橋

渡れと

かけた

渡るつもりで

今日まで

わたが

竹の一本橋

渡らりよか

葱

葱と楮と

故郷と思ふ

故郷出るとき

畑の葱よ

葱も楮も

風に吹かれてた

唄

唄が聞える

渡り鳥が渡る

細い さびしい

機織唄よ

けふも渡り鳥が

空を飛んで渡る

矢車草

矢車草の葉の蔭に

かくれて

鳴いた

きりぎりす

姉上さまには

だまされた

母上さまにも

だまされた

かくれて 鳴いても

矢車の

車といふ名に

だまされた

岡の上

霞の中に

黄金色かぬいろの

茶種の花は咲きにしが

葎の芽に降る

春雨の

そそぐ響きも聞きにしが

麥の葉に吹く

曉の

風も靜に吹きにしが

霧の中から

しとくと

草に甘露の霧が降る、

川しぶき

さつさ行きましよ

あの山越えて

花は咲けども

ふるさとの

月はおぼろに

川しぶき

さつさ行きましよ

あの川越えて
花は散れども
ふるさとの
月はなつかし
川しぶき

有明お月さん

昔の あなたと

違ふから

この頃 わたしは

つらくてよ

どうすりや わたしは

いいのだらう

昨夜も 一晚

泣いたのよ

昔のあなたに

しておくれ

有明お月さん

たのんだよ

うづまさ

河原に立つて

利根川の

水の青いを見てゐると
胸に涙が湧いて来た

河原の岸に

ぐるぐると

小さい渦が

まいてゐる

手を取り合うて

戀人と

あるいて見たい

氣さへする

小さい渦に

ぐるぐると

まかれてみたい

氣さへする。

熱い涙

もぬけの 殻の
わが戀よ

この世は 旅の
空蟬うつせみか

永い 月日は
夢の間に

熱い 涙よ
胸の火よ、

兩國のあたり

兩國の橋を渡つて
ゆきました

十八か 十九位の
女です

「口入業」と書いてある
路次の出口で あひました

髪かみの毛の 房々かきくとした
女です

角豆畑

山で別れた子に逢はず

子ゆゑ吾妻の鶯は角豆畑に啼いてゐる。

きのふ榊の木の枝に

笹の枯葉に眼を衝いて父よ父よと鳥がゐた

けふも榊の木の枝に

笹の枯葉に眼を衝いて母よ母よと鳥がゐた

山でわかれた子に逢はず

風のふくの鶯は角豆畑に啼いてゐる。

櫛

裏の川端かはたの

さらさら蓬

思ひ返して

みる氣はないか

今朝けさも 裏戸に

櫛が落ちてゐた

通つて來たのか
可哀かわい想まうなものだ

砂の上

砂すなに 字を書いた

別れと

書いた

永い別れと

思へと

書いた

書いた字を見て

足で砂

踏んで

さくり さくりと

涙で

踏んだ

そのころ

枯れた草さへ

昨日の——夢を

夢をよ——

うつらくと

繰り返してる

夢をよ——

冬の月さへ

昔の——夢を

夢をよ——

うつらくと

繰り返してる

夢をよ——

夢だ 夢だと

わたしも——思た

思たよ——

うつらくと
つくぐ——思た
思たよ——

十七花

川の向ふの

十七花よ

辛いだらうが

赤く咲いてお呉れ

情^{なさけ}なからうが

十七花よ

川の向ふで

赤く咲いてお呉れ

赤く 燃えるやうに

十七花よ

辛いだらうが

赤く咲いてお呉れ

見はてぬ夢

戀人と ゆうべ別れた

停車場を

今朝は 一人ひとりで

あるいてる

乗り降りの 人の往ゆき來きを

眺めたり

そちら こちらと

あるいてる

なつかしき 見はてぬ夢に

そそられて

今朝は一人ひとりで

来たである

煙草の花

お蔭嫁さま

煙草の花は

元の男の 烟おとに咲いた

お蔭嫁さま

もう 諦めた

何にも縁だと もう諦めた

切れた障子の
穴から見たら
後向きして絲繰りしてる

傘の下

どこで生れた
安來の 町かよ
雨の降る日に
生れたのかよ
聞いてください
十七頃は
いつも涙で

しめつてゐるのし

それが聞きたい

傘かさの下したで

雨の降る日に

生れたのかよ

鳴

田は枯れて 了しまつたし

どこも ことも

寒い風が吹いてゐる

日暮方になると 田甫たふの中で

すい すいと

鳴が 啼ないてゐた

おもよは 赤い花簪はなかんざしをさして
家の前に
出て見てゐた

細い聲で 鳴は
すい すいと
啼いてゐる

おもよの 心も
初戀に
すい すいとしてゐた

田は枯れて 了しまつたし
どこも どこも
寒い風が吹いてゐる

たそがれ

蘭菊らんぎくの花はさびしい

川越かはこえの

「小料理店」と書いてある

「小料理店」と書いてある

蘭菊らんぎくの

花はさびしい
一夜妻いちよつま

たそがれ頃に とぼされる

川越かはこえの

鼠鳴きしてゐた女

錯

錆

窓の格子かざしに よりかかり

「いつまた来るの」と

泣く女

錆さびた庖丁ばうちょうの かなしくも

「はかない身だよ」と

さうか知ら

ただ明け易い 夏の夜の

街まちはあかるい

青すだれ

磨といても磨といても 庖丁ばうちょうの

錆さびは磨といても

さうか知ら

歸らぬ人

川の向ふで

水鶏が啼いた

歸りやんせ

歸りやんせ

月もおぼろに

河原さ出てる

きつと忘れて
ゐるんだよ

片戀

戀しくて

裏へ出て見りや

青い空

はかない

わたしの

片戀よ

はかない

わたしに

何故したの

荒海のやうな

ところに

何故したの

蚯蚓の唄

「わたしも一緒に連れてつてお呉れ」とおみつは
一緒にゆく氣になつてゐる

夜は

しん／＼と更けていつた

「わたしや もう 着物も帯もいらない」と男の胸に
顔をあててしん／＼泣いてゐる

厩の背戸で かなしさうに
蚯蚓は唄を うたつてゐた

畑の土

おつた 輝さま

つまらなささうに

背戸の畑で 種蒔きしてる

可愛女があるではないし

おつた一人を

たよりにしてた

なんのつもりだ 畑の土は
今日も^{ほしや}燥いで
ほさりとしてる、

晝顔

他愛なく 花は咲き

他愛なく

花はしほむ

かなしくはないの

娘等よ

渚の岸の 沙原に

晝顔の花は

しほみゆく

なんと云ふさびしさだらう

娘等よ

指輪

わたしかはいなら

指輪買つてお呉れ

指輪なしでは

手がさむしいわ

指輪買つてやる

指輪買つて送る

帯も買つてやる
足袋も買つて送る

わたしかはいなら
下駄も買つてお呉れ

下駄も買つてやる
日和下駄送る

憎い女

空吹く風だと
思はりよか

憎いことした
をんなごを

わすれようとて
わすられず

たたいてやりた
このころ

月影

薄桃色の

ハンカチを

ちつと見つめて

泣いてゐる

窓の硝子に

さす月も

おぼろ月夜で

青いこと

薄桃色の

ハンカチに

なにか書かれて

あるか知ら

更けゆく夜

絹のシヨールに

冬の夜の

ほのかに 青い

月がさす

ほのかに ほのかに

かなしくて

熱い 涙が

落ちて来る

わたしは この世の

すたれ者

君ゆゑ わたしは

すたれ者

ほのかに ほのかに

かなしくて

熱い 涙が

落ちて来る

昔の月

お前と逢うた

武藏野に

青い昔の月が出た

お前も見たろ

武藏野の

畑の中に家が建つ

畑の中の夕雲雀

もうおれは

故郷へ歸るぞよ

馬鈴薯

白い花咲く

じゃがたらいも
馬鈴薯よ

月の出た夜は

畑の中で

月のない夜は

馬鈴薯よ

どうか誰にも
言はずにお呉れ

霜 夜

ギターで 唄ひませうよ

わかれの歌を

共に 涙で

唄ひませうよ

寒い 霜夜の

霜枯れ空に

お星さまさへ

ふるへて見える

さあさ 唄ひませうよ

涙で 共に

君とわかれの

かなしい歌を、

新開田

今朝も 鶉が

新開田で

啼いた

鶉戀しい

畑の鶉

可愛男の

新開田で

啼いた

梭の音

矢車草の 咲く村で

日の暮れ頃だと思やんせ

トントン カラリと

梭の音

トントン カラリと

梭の音

矢車草の 咲く村で
糸より細いと思やんせ

トントン トロリと

唄の聲

トントン トロリと

唄の聲

裏戸の音

夜の夜中に
裏戸を叩く

ことんくと
ときたま叩く

今夜來るとの
たよりはなすが

可愛男ぢや
ないか知ら

甚吾さん

枝垂れ 柳の

謎ばかりかける

わたしや 恥かし

甚吾さんの謎が

何んで 解かれませう

甚吾さんの謎を

あれさ 甚吾さんよ
かけずにお呉れ

夢

昨夜^{ゆうべ} 夢見た

喜藏さんの夢を

ゆかし なつかし

一晩中^{ほんちゆう}見てた

去年 喜藏さんに

手の甲 引つかかれた

うつら うつらと
その夢を見てた

胸の糸

妻となり 妻と云はれて

年月を

すとして来たに

なぜか知ら

今日も 解けない

腕の糸

誰かに引かれて

ゐるのだろ

机の下に 紫の

インキで書いた

用箋が

二つに裂かれて落ちてゐた

誰に たよりを

出しただろ

誰に たよりを

出しただろ

沙の數

沙がれ濱で聞く唄は

みんな悲しい

唄ばかり

沙の數ほどかぞへても

別れた人は

歸らない

涙ぐましくなつて来て
泣かずに 泣かずに
ゐられよか

夜さり唄

駄目ぢや 駄目ぢやと
話も聞かず

話どころか
姉上さまよ

歳も 歳だし
何うした ものぢや

男振りでも
よければ よかる

君が名

「別れ」と云ふ字がかなしくて

火鉢の中に 書いて消し

消しては書いて

泣きました

「消して書いても

過ぎし日の

今ははかない

空だのみ」

「口に甘いは

いつはりの

人の言葉と

露しらず」

「處女のほこりも たはむれの

幻まぼろしよりも

淡かりし」

かなしきまに 君が名を

火鉢の中にいくたびも

書いて 眺めて

泣きました

菖蒲の花

菖蒲あやめの花に

初夏の

君の姿が偲ばれる

君の姿は

初夏の

咲いた菖蒲の花でした

厩の背戸に

しよんぼりと

咲いた菖蒲の花でした

菖蒲の花に

初夏の

君の姿が偲ばれる

可愛い君さま

可愛い君さま茨城の

山にさびしい

日が落ちる

西の山でも火が燃える

東の山でも

火が燃える

可愛い君さま十六の

胸の焰の

火が燃える

垣根の外

秋晴れの

垣根に咲いた

コスモスよ

人なつかしい
桃色の

淡いころの

コスモスよ

若い女わかんなが しよんぼりと
垣根かきねの外そとで
唄うたつてゐる

戀こひは悲かなし
コスモスの花はなよと
唄うたつてゐる

旅で暮らせば

旅で暮らせば
茅野かやのの
雨あめも
さらり さらりと
身にみしみる

博多人形

博多人形は

なみだの

人形

手と手 握つて

泣いてゐる

阿蘇

阿蘇あそは

火を吐く 戀路の

ほのほ

くめよ 熊本の

かはい人



◀夢の上沙▶

大正十二年四月十一日印刷
大正十二年四月十五日發行

(定價六拾錢)

著作者

野口雨情

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地

發行所

新潮社

電話牛込
八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

現代詩人叢書

【第一編】	沈黙の血汐	野口米次郎氏著
【第二編】	蠟人形	西條八十氏著
【第三編】	預言	川路柳虹氏著
【第四編】	田舎の花	靈生犀星氏著
【第五編】	季節の馬車	佐藤惣之助氏著
【第六編】	青き樹かげ	三木露風氏著
【第七編】	炎天	千家元麿氏著
【第八編】	澄める青空	生田春月氏著
【第九編】	風車	百田宗治氏著
【第十一編】	愛慕	白鳥省吾氏著

▲づ錢六册一料送◆錢拾六册一價定
—頁十六百册一數紙—

中田幸四郎

新入字をいふも詩の必西女である。三山は山
高き山は詩の最上力有る詩の安である。

大正十年四月十日 幸四郎

終

